イベント報告

2022 年秋季大会　講演 1

『スタートアップによる知の社会実装　課題と展望』

馬田 隆明

起業家志望者の育成や起業家コミュニティの形成を目的とした東京大学のスタートアップ支援機関である FoundX にて、インキュベーション施設の運営や初期資金調達支援をしている。また、現役生にはアントレプレナーシップ教育を提供し、卒業生や研究者にはスタートアップのサポートをしている。私は気候変動にも興味があり、Climate Tech の分野でも活動している。

FoundX は、主に大学の知識を生かした“ディープテックスタートアップ”を中心にサポートしている。ディープテックスタートアップとは、高度な研究開発が必要な技術を持ちながら、急成長を目指すスタートアップのことだ。最新の技術を使っているだけではディープテックスタートアップとは限らない。私たちとしては次の産業を作っていく観点を大切にしており、わずか 3 ～ 5 年で 500 億円以上の資金を調達し、新しい産業を築くような企業をイメージしている。これは、全体の 1% 程度とごくわずかなものだ。

現在、ディープテックスタートアップの課題は 6 つほどある。まず、起業家の不足が挙げられる。資金調達者の数が減少し、アイデアの量も減少傾向にある。次に研究者の不足だ。東大でも研究室在籍の人数はごくわずかで、研究室の血筋が途絶えてしまうという課題も懸念する。3 つ目として、投資会社が創業者に不利な契約を持ち掛けることにより社会実装に至らないケースだ。さらに、中長期で取り組む課題として、ディープテックは BtoB が主流であるため、セールス・サポート体制構築などビジネスサイドも育てていくことも重要だ。5 つ目として、技術と事業が密接に関わるため、初期段階に営業をしていくなかで、顧客の課題を解決するために、シーズ技術を捨てざるをえないことも多々あることだ。最後に、ディープテックスタートアップの資金調達や上場が難しいという構造的な課題もある。

これらの課題に対処するためにいくつかの取り組みをしている。まず、研究者向けに助成金の獲得、企業向けには助成金の使途報告、その後の資金調達まで支援をしている。次に、細かくフェーズを分けて調査を重ねピッチして検証するという“ディープテック起業ゼミ”の実施、さらには、社会実装のためのルールメイキングにも取り組んでおり、そのための大学の人材育成と政策提案の機能を大切にしている。

（文責・浜本 亜実）

馬田 隆明
東京大学 FoundX ディレクター
University of Toronto 卒業後、日本マイクロソフトを経て、2016 年から東京大学。東京大学では本郷テックガレージの立ち上げと運営を行い、2019 年から FoundX ディレクターとしてスタートアップの支援とアントレプレナーシップ教育に従事する。スタートアップ向けのスライド、ブログなどで情報提供を行っている。著書に『逆説のスタートアップ思考』『成功する起業家は居場所を選ぶ』『未来を実装する』『解像度を上げる』。